GBNをヘイズル縛りで行く

MK/シュウ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
特典もねぇ！
チートもねぇ！
まともに動かせるのヘイズルしかねぇ！
な男（いちおう転生者）のお話。

目　次

０１　プロローグ ―― 1
０２　デビューと感想 ―― 3
０３　機体考察とチートとノコギリ ―― 6
０４　ＰＶＰですよ ―― 9

０１　プロローグ

諸君、ガンダムでどの機体が好きかい。
無難にガンダム系の機体を言う人もいるだろうし連邦、ジオン系の機体を好む者もいるだろう。ひょっとしたら平成ガンダムの者もいるかもしれないし、小説、ゲームでしか出ないマイナー好きもいるだろう。
私は地味に前世の記憶もあるが、実際能力やチートがある訳じゃない。ただのガンダム好きだ。
それをふまえて言おう。
ヘイズルは良いぞ。
え、知らないって。
簡単に説明すればＺの番外編の小説に出てきたティターンズの機体だ。
詳しく説明すれば形式番号ＲＸ―１２１―１　ＧＵＮＤＡＭ　ＴＲ―１。
ティターンズのテストチーム［Ｔ３部隊］で運用された機体。
ＲＸの型番の通りガンダムの一種だが、実際はジムクゥエルの体にガンダムの頭を載っけたのが始まりだ。
それにいろんな技術を試験として盛り込まれたのがこの機体だ。
後に所謂［ＴＲシリーズ］、いや可変ＭＳ、可変ＭＡなどといった連邦軍機体の試金石となった。
Ｚ以降の連邦モビルスーツの祖と言われてもおかしくないと思う（個人的な意見です）。
どのように活躍したかは「Ａｄｖａｎｃｅ　ｏｆ　Ｚ　～ティターンズの旗のもとに～」を読むことをお勧めする。
私がこの機体をはっきりと知ったのはＧジェネだった。終盤には開発して主力として使っていたぐらいだった。
勿論、他のＭＳも好きだ平成系を知るきっかけとなったウィングガンダムゼロ（ＥＷ版）、ガンダムの中でも量産機然かつ泥臭さがいい陸戦型ガンダム、それの現地回収機であるガンダムＥＺ―８。他にもジ

ムストライカー、ザクＦ２型、スレイヴレイス、イフリートシュナイド、ヒルドルフ、ペイルライダー…

平成も含めるならばストライクノワール、ストライクダガー、ディスティニーインパルス、グレイズ、クランシェ…上げようモノならキリがないので此処までにする。

しかし、総合的に見てもヘイズルが最も好きな機体である。

他の連邦系モビルスーツにはない足部分のゴツさ、頭部デザイン、装備のロマン、機能性、バリエーション、拡張性…畜生、キリがない。

言葉で説明するのが惜しいほど、ヘイズルは私にとって素晴らしい機体だ。

あれこれ言ってるが要は私はヘイズルが大好きだということを覚えてほしい。

そして、二度目？の人生には、ガンプラでやるネトゲがあった。

自分の好きな機体で戦えるんだぜ？

多分、誰だって押さえられないモノがわき出るだろう。

じゃあさ、やるしかないだろう？

これだけ言っておいてアレだが、これは記憶だけの転生者『夜崎片助』が好きな機体で戦いたいだけの話だ。

０２　デビューと感想

さて、私はヘイズル改をかってもらい、ＧＢＮのアカウントもギアも用意してもらった。ありがとうトーチャン。でもヘイズルはジムクゥエル買わないと作れないんだよなぁ…悲しいなぁ…

あとは、作るだけだ。

勿論、後で改造する予定なので部分塗装と関節の処置に押さえておく。

腕部分の後ハメ化は必須だ。

特に後できれいに作りたいのならば。

ヘイズルの腕部は旧ザクや陸戦型ガンダムと同じような二重関節構造になっており、前腕部の固定部分は一度組み立ててしまうと塗装するときに分解する必要が出てくるし破損のリスクが伴う。関節側の固定部分を前腕部がすぽっと抜けるように切っておけば塗装時に楽ができる。ある程度切りすぎても最悪組み立てるときに瞬間接着剤使えばよし。あとシールドの接続部分を切ってしまわないように注意。シールドの接続部分も新造したいなら話は別だが。

あ、ゲート処理は言わずもがな。

塗装は頭部カメラアイ、各部のセンサー、ブースター内部、腰の一部、指先、ライフルのセンサー、シールドブースターの一部。

ここまでできるのに２日掛かった。

因みに私は現在小学４年生である。家に帰ってからの時間は非常に限られている。

さて、出来たので早速入ることにする。

ログイン中…

やはり、ＶＲというだけであって現実と遜色ないな。

私の目の前には大量のダイバーもとい人間人間人間人間人間人間人間人間人間人間人間人間…

やっぱ今生でも人混みは嫌いだし苦手なようです。うぇっぷ。

因みに私の外見は若干髪長めでロングコート着た少年です。
まあ、ひとまず初心者用のミッション受注しましょう。
しばらくお待ちください…
さーて、初心者向けのミッション受けて格納庫にいます。
目の前のにはヘイズル。ちゃんと1分の1です。
お〝ッ…これいい…（恍惚）。
因みに装備はビームライフル（ショートバレル）、シールド（曲面仕様のヤツ）、シールドブースター（背部バックパックに接続）。
はい、初期仕様です。シールドブースタもう一つほしい…。
でもよく見たらまだまだ甘いところがある。
早く設備整えて完成させねば。
さて、機体をカタパルトに乗っけてっと…
いくぞおおおおおおおおお！
さて、カタパルトで飛ばされた感想はかなりGがすごい。
飛んでるときの感覚はACに近いけどなんか違う。
どちらかというとデモンエクスマキナに近い。
でもブースト中の左右への方向転換はやりにくい感じがする。
とりあえず作戦領域まで飛ぼう。
因みに作戦領域まではオートで行けるそうですが私はマニュアルで行きました。そっちの方が楽しいじゃん。
作戦領域は光のドームで囲われていた。
いったん領域前で着地し、地表から作戦領域に突撃する。
【ＭＩＳＳＩＯＮ　ＳＴＡＲＴ】
システム音声とコンソールが表示される。
目の前にはリーオーＮＰＤ…まあｂｏｔがいる。
大型のライフルをこちらに向け、撃ってくるが小さく跳躍を繰り返しながら避け、反撃にライフルを撃つ。俗に言う小ジャンプ移動である。実際、ブーストゲージは存在しており、多分切れると一定時間ブースト系が使えなくなるだろう。それに小ジャンプ移動は敵の照準をつけにくくさせる効果もある。正直言っていきなりできるとは思わなかった。

因みに照準はある程度の範囲は補正が入るが基本自力だ。ＦＰＳにＡＣのサイトの概念をぶち込んだ感じだ。
自力で大体の狙いをつければあとは機体側が補正してくれる。
ＦＰＳやってなかったらただのカカシだった。
機体操作もどういうわけか直感的に行える。
多分ログインする前につけたゴーグルみたいなやつが脳の信号を拾って制御してるのだろう。
ＡＣのようにボタンが多すぎて専用の持ち方を編み出さなくても良い。
これは良いゲームですわ…
さて、戦闘に戻ろう。
ライフルだけでもＮＰＤリーオーの耐久は７割減らせてる。
簡単仕上げだけど結構行けるもんだなぁ…
するとＮＰＤリーオーがビームサーベルを抜刀する。接近戦仕掛けられるのが面倒だがライフルの残弾は少ない。
既に予備弾倉が１つしかない。
ちょっと賭けるか…
背部のシールドブースターに火を入れ、一気に加速する。
サーベルが当たるギリギリで左足ブースターポッドを使用。サーベルはシールドで防ぎつつ、左にずれる。
避けきったら右足で踏みとどまりつつブーストを停止、勢いで右に旋回する。
背中にライフルを向ける。
因みにＮＰＤリーオーのベースとなったリーオーは胸部のコックピットハッチ以外でも背部からも出入りできる。
そこに全弾叩き込んだ。
程なくしてＮＰＤリーオーは倒れた。
いやあ、ほんと意外といけるもんだねぇ。
殆ど当たってたのは末端とかだったしやっぱ致命取れるところは狙うべきだよなぁ。
とりあえず、ミッションは達成したので帰ってログアウトしよう。

０３　機体考察とチートとノコギリ

とりあえず、一週間ぐらいにＧＢＮやってみたがやっぱし現実と同じ感覚で体が動かせる。

機体に関しては殆ど思考操作でコンソール操作はほんの一部。どうやって思考拾ってるのか気になる。やっぱ頭のギアか？

因みにヘイズルはドロップでシールドブースターが出たので３枚装備にしている。やったぜ。

因みにパーツは近所の模型店の形成射出機で実体化してもらった。ほんとすげぇよこの世界。

シールドブースター３枚装備にしてみたが直線起動はすごく早くなった。でも旋回性能は実に劣悪である。実質制御用ブースターが脚部のブースターポッドしかない。

ターンピックよろしく片方のシールドブースターを吹かして曲がりたい方のシールドブースターは使用しないという方法でどうにかやっている。

そして現在。

「死んでポイント置いてってもらおうかぁ!?ええ!?」

チーターに現在進行形で襲われてます。

どうしてこうなったぁ!?

別にミッションが前金とか簡単で報酬高いミッションじゃあないんだよ!?

なのになんで乱入!?

しかも硬いし！

このストフリぱっと見そこまでの出来じゃあないのになんでぇ!?

せめてゲート処理はしろォ！

やっぱチートじゃあないか。

いつの世界もネトゲを荒らすのはチーター、はっきり分かんだね。

実際余裕そうに見えますがそれは回避に専念してるからであって一発受ければ即死です。

相手がクソエイムなのが救い。

【味方機体の接近確認】
え、味方⁉しらないよそんなｍ
急に土埃が舞った。
そこにはやたらとずんぐりむっくりと角ばった機体…グスタフカール…の改造機がいた。
「なんだぁ⁉てめぇはァ⁉」
チーターはグスタフカールに向かって撃つが最小限の動きで避けられる。
とゆーか一部ステップが混じってる。
ダクソとかブラボを彷彿とさせますねこれは…
グスタフカール改造機が左腕のクローをチーターに向け、発射する。
クローにはワイヤーがついておりチーターは反応する暇もなく絡め取られ、グスタフカール改造機に引っ張られる。
グスタフカールが背部のデカブツを掴むと、デカブツが展開し中から巨大なチェーンソーが現れる。
そしてそれはチーターの右腕部を根こそぎ削り取った。
「なんでだよ⁉こっちはデカール使ってるんだぞ⁉」
「…うるさいなぁ、ただのプラスチックが金属に勝てるわけねーだろ」
あれ金属製かよ！
その間にもストフリの翼、左腕が切断される。
まるでテレビで見たマグロの解体ショーだ…
「やめろォ！やめてくれぇ！俺が悪かった！ゆるじでぐでぇ！」
「そうかそうか」
そう言い左手でストフリを持ち上げ、右手を腹部に勢いよく突き刺す。尚その間もストフリは魚の如くびちびち動いてた。
引き抜いたらその手には中の人もといパイロットが握られていた。
にしても見事な内蔵攻撃だぁ…
「それじゃ、こんな目に会いたくなけりゃ二度とチートはしないこったな！このマス■■が！」
そう言い、グスタフカール改造機は中の人を握りつぶした。おおう

…ポリゴン状に消えたとはいえ酷ぉい…
「さて…と、済まなかった、急に乱入して。」
「いえ、助かったんで気にしないでください。」
あら以外と紳士的。
「にしても見事な内蔵攻撃でしたね」
「わかる人がいるだと!?」
数分後ぉ…
「なんというか…年甲斐も無くはしゃいでしまった。申し訳ない。」
「いや、気にしないでください。こっちも話のわかる人がいて嬉しいくらいなので…」
ついうっかり盛り上がってしまった。
因みにこの狩人兄貴は『カゲ』と言う御方らしい。
「で、先程のストフリクソチーターは?」
「ありゃマスダイバーって呼ばれてる存在だ。ブレイクデカールなるログにも残らんしセキュリティにも引っ掛からんチートツールを使ってる連中だ。まあ、俗称だけどな」
「検査しても発覚しないとか…ドーピングコンソメかよ…」
「故に、運営も一斉検挙に移れておらず殆どがダイバー頼りなんだよな。にしてもドーピングコンソメは草」
「受けたようで何より」
「ん?他のとこでマスが現れたようなんで行くとするよ。」
「それじゃ、オタッシャデー!」
「『カッター』=サン、オタッシャデー!」
彼はそのままグスタフ改造機（機体名：グスタフ・イエーガー）に跳び乗り、そのままどこかに飛んでった。因みに『カッター』というのは私のダイバーネームである。
因みに、帰還後フレンド申請にカゲ兄貴のが来てたんで秒で受理しました。やったぜ。

０４　ＰＶＰですよ

ストフリ解体ショーから数週間後、ちょくちょくマスに襲われてはカゲさんに助けられ…と言った生活を送ってました。
そしてカゲさんにマスへの対処法として金属武器というのを教わりました。
曰く、データ上は金属だとしてももとはプラスチックなので金属製の武器ならそこそこの質量と鋭さがあるなら確実に通用するそうな。問題点はそれを扱うだけの関節強度と重量とお値段と手間とフツーのバトルだと強すぎるというところだ。
あと物理的に燃やせる武器を搭載するのもありだそうな。発想がプラモ狂四郎のアレだぁ…
放電機構とかスプリングとかハンダ線ヒートロッドとか水鉄砲とか水中用モーターとか…うん、今考えても狂ってる。嫌いじゃないわ！
そしてカゲさんのアバターはヤーナムにいそうな狩人でした。とゆーか狩人だった。
ヘイズルについては、昨日ようやくハンドパーツを市販の汎用パーツに変えました。これでダブルトリガーができる（恍惚）。
そしてジムカスタムの脚部パーツがドロップしたので後日、組み込もうと思う。
さて、今日はＰＶＰに手を出してみた。

このゲームではＰＶＰチーム戦はフォースと呼ばれるチーム間で行われる。しかもフォースというのはある程度のランク以上のダイバーが複数人いないと組めない。だからといって、ＰＶＰチーム戦ができないわけじゃない。基本的にはフォースに所属してないもの同士の場合、ランダムでチームが組まれる。
で、今回は５ｖｓ５。どちらかが先に全滅させるか３０分経過してどちらかより生き残ってたら勝利。

さて今回使う機体構成、ヘイズルはダブルトリガーになりました。あとシールドブースターは汎用アームで腰につけました。その代わり腕には曲面シールド。目消し等施しておいたので多少耐久性は良くなってるはず。

味方機体はゼータガンダム（３号機カラー）、ヘイズル（自分）、リーオー（トールギスのブースター付き。）、ロト（原型を留めないほど改造されていてもはやＡＣ）、ライオットＢ。

ちょっとまて、ＡＣロトはまだいい。

なんでスパロボの機体がここに？

ライオットって…ＵＸで初期主人公機で最終的には爆発するやつじゃぁん…なぜこのチョイス、嫌いじゃないわ!!

え、そろそろ開始？

開始前の一幕

レイ（Ｚ３号機の人）

「何だこれは」

カッター（私）

「うん、それは同意する」

のっち（ロトＡＣの人）

「何か問題でも？」

サンリ（ライオットの人）

「うん、自覚はしてる。」

フライン（リーオーの人）

「…だめかな？」

レイ

「うん、だめというわけじゃあ無いんだ。うん、でも…ネタ成分多くない？財団Ｂにマークとかされそうで怖くない…？」

のっち

「あ、そうなんだ～…で、それが何が問題？」

カッター

「大丈夫やろ」

サンリ

「(怖くは)ないです。」
フライン
「大丈夫だ問題ない」
レイ
「…うん、とりあえず、よろしく。」
とりあえず作戦はＺ３の人が空中で索敵と支援しつつその他はツーマンセルで敵を見つけ次第しばく…といったものだ。
のっちとフラインが組んで、私とサンリが組むこととなった。
「何故にライオットなんだ…」
「ガンプラ以外で戦っちゃだめなのか？」
「いや、他の人は大体がガンプラだから…」
「過去のガンプラバトルを知ってるかい？」
「ＧＰＤのことかい？」
「いや、ＧＰＤよりも前の…単純にガンプラバトルと呼ばれてた時代の事さ。」
「⁉さらに前があったとでも言うのかい⁉」
「コレの基盤となっているプラネットコーティング技術だって、もとはプラフスキー技術から発展したものなんだ。」
「そうだったのか…」
「やっぱりその当時もガンプラ一強で、ガンプラじゃないとまともに動かせなかったそうなんだ。」
「じゃあ、なんで今も尚他の模型会社が生きているんだい？」
「そこなんだよ！当時まともに動かせないガンプラ以外のプラモで互角…いや、それ以上に戦った人たちがいたんだ！」
「それに憧れた、と？」
「もちろん、そうだ。そしてもう一つある。」
「それは？」
「ただ単純に、コイツ《ライオット》が好きなだけさ。」
「…」
顔は見えなかったが、通信音声だけでもわかる、小学生のような純粋さ。現小学生の私が言うのもあれだが、この人は小学生並、いや、そ

れ以上にただ単純に好きな機体で戦えるのを楽しんでいるのだろう。
どこもかしこもガンプラだらけかと思ったが、そういうわけではなかった。
突如、警報が鳴る。
「ッ…警戒！」
「応」
背中を合わせ、周囲を索敵する。
瞬間、明るかった筈の司会が影が差し込んだかのように暗くなる。
「上か！」
それは人型だった。スリムな体型に、太陽を背にしてもギリギリわかる程の暗い赤色。そしてその機体の首からはマフラーのような布が生えていた。
「イヤーッ」
「何ぃ!?」
暗い赤色の機体がが発射したワイヤーがライオットに巻き付き、引っ張られる。
追撃しようとする
「来るな！こっちはこっちで片付ける！そこを」
通信は途切れた。
「…ジャミングか？」
ミノ粉か、ＥＣＭか、あるいはＧＮ粒子か…確かあのコジマモドキレーダー効かなくなるはずだったよな？
「さてと」
茂みから出てきたのはフレームとシリンダー２本だけで腹部を構成し、腰部と背部の大型ユニットが目立つ、ガンダムらしき機体。
「こっちもやりますかねぇ…」
その機体は、背部から大型の実体ブレードを取り出した。
「まじか…」
一応、その機体は記憶にあった。
ガンダムマルコシアス…鉄血のオルフェンズ本編には登場しなかったもとい本編前に失われたガンダムフレームの内の１機。いわ

ばＭＳＶ的な奴だ。そして、だいたいの宇宙世紀の機体とは相性が最悪だ。
その理由は動力源たるエイハブリアクターから垂れ流されるエイハブウェーブに影響して硬化するナノラミネートアーマーだ。
そのナノラミネートアーマーは非常にビーム兵器に強い。そのせいかオルフェンズ本編の機体はだいたい物理兵器しか搭載していない。
量産機を無力化するにしても高出力のビーム出ない限り無理。しかもエイハブリアクター2基搭載したガンダムフレームじゃ尚更だ。
何が言いたいかって言えば…ヘイズルはビーム兵器しか積んでないから殆ど詰みと言う事だ。
「それじゃあ…死のうかッ！」
「ッ…」
右手の大型の実体ブレードで縦に殴りかかってくる。右腕のシールド曲面シールドで受け流した後、左後方にブーストして逃げる。
一応ライフルで頭部と胸部を狙う。
「貧弱貧弱ゥ！」
やっぱり全く効いておらず、右手のライフルを投擲された小型ブレードで弾き飛ばされる。
一応左手のライフルは残ってるが右手より射撃に慣れていないためあまり意味が無い。
多分背部のビームサーベルも効かない。
「手詰まりか…いや」
まだ手はある。ＧＰＤでも前身のガンプラバトルでもやりたくないというか自分がされたらめっちゃ嫌な方法が。
「これで終わりだぁ！」
「なんのぉ！」
振り下ろされた実体ブレードを左にいなす。
その段階で左肩の装甲が破損する。
しゃがみ、脚部のブースターポッドに火を入れ、相手の腹部めがけて衝突する。

「なっ…」
勢いでよろけるマルコシアスを押し倒し、細い腹部を足で踏んで抑える、そして右腕を掴む。そして上と左方向に力をかける。
サブミッション、関節技である。
ガンプラいえど関節はある。それでこそ関節が針金とかそういう類でできたやつじゃない限り、無茶な方向に曲げれば、大体のものは壊せる。関節が針金の類というのが気になったのならば是非ともプラモ狂四郎を読んでほしい。
実際のガンプラでやったらされた側は確実に修理の面倒くささで泣きを見る目に合うだろう。
「やめろォ！」
「やだ！」
だってビーム効かないし物理武器ないもん！
だったら関節もぐしかないじゃない！
そのまま、右腕を引っこ抜く。
ビームサーベルを引き抜き胸部装甲の下に刺す。ダメ押しで落ちていたマルコシアスの小型ブレードを拾い、さらに刺す。
「残念だな、コックピットは無事だぁ…」
「と、思うじゃん？」
マルコシアスから爆発が起こる。
「な、リ、リアクターが！」
ビームサーベルもブレードの左側のエイハブリアクターに刺さっていた。
「ね、狙ったか！」
「残念、たまたまだ」
そのまんまマルコシアスから離れる。
本当にたまたまなんだよなぁ…
「い、嫌だ、こんな残念な堕ち方は嫌だあああああああああああ！」
マルコシアスが倒れ、数秒後、爆発四散する。
ふう…相手さんがサブアームの制御になれてなくて助かった。よし、ライフル回収しよう。

「無事だったか？」
　ライオットの人が茂みから出てくる。
「そっちは？」
「どうにか仕留めた。あのニンジャ…カラーリングからして某スレイヤーさんかと思ったら実際に頭部に忍殺って書いてあった。」
「アイエェェェ…」
　やっぱりニンジャスレイヤーだった（結論）。
「助けてくれ！化物だ！」
　通信が入る、レイからだ。
　上空を変形したゼータが飛行していく。それは各部が炎上していた。
「こいつ、いきなり現れたかと思ったら瞬時にちっさいのがやられた！しかもこいつはその場で静止したり、急な角度で曲がる！サブ装備はリーオーがやってくれたが…」
「大丈夫か!?」
「来るな！タイムアップまで逃げれば…クソっ」
　被弾する音、それによるアラートが通信越しに聞こえる。
「やめろ…やめろ…」
　恐怖とアラートが、切り忘れてた通信から垂れ流される。
「俺のそばに近寄るなあああああああああ!!!!!!!!」
　断末魔。
　次の瞬間にはゼータは木っ端微塵になって、その破片は地表に落下する前にポリゴン状になって消失した。
　爆発と、ポリゴンの塊からその下手人が現れる。
　目に映ったのはセイバーフィッシュみたいななにかだった。
　原典よりも、異常に丸みを帯びており、主翼が破損してるにもかかわらず、飛行していた。
　これじゃあ、まるで
「R戦闘機じゃあないか…」
　心の内を代弁したのはサンリだった。
「いや、これは…」

Ｒ戦闘機じゃない。それらしきものだ。
そう言いたかった。だが、通信と自分の目が、それを否定した。
そして、それを考える余裕はすぐに無くなった。